

4 職員研修

(1) 大学図書館職員長期研修について

- ① 主催：筑波大学
- ② 日時：平成30年7月2日（月）～7月13日（金）
- ③ 会場：筑波大学春日エリア 情報メディアユニオン
（7月13日のみ筑波大学附属図書館（中央図書館））
- ④ 受講者：国立大学・大学共同利用機関 25名
公立大学 1名
私立大学 5名

(2) 研修報告

平成30年度大学図書館職員長期研修報告

福島県立医科大学附属学術情報センター 唐橋敦子

平成30年7月2日から7月13日まで、筑波大学にて開催された大学図書館職員長期研修に参加した。約2週間に渡って受講した、図書館マネジメントと学術情報流通に関する18科目19コマの講義と、企画立案・プレゼンテーション等を学ぶ演習・班別討議16コマについて、概要と一部の講義を紹介するとともに、その他印象に残った事柄について報告する。

平成30年度 講義記録：<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/choken/2018/nittei.html>

図書館マネジメント総論

元ビジネスマンの手掛ける大学経営、電気工学のトップ研究者でもある図書館長から見た大学図書館、大学評価の視点でみる図書館、国立大と私立大の図書館管理職による現場での取り組み、期待される新たな職員像、等々、図書館の内と外、両方から見た現状と課題について知見を得た。また、組織経営やストレスマネジメントの基本を学んだ。

・「経営学入門」では、マーケティング論の基礎に触れることができた。例えば、ニーズ（＝課題）と欲求（＝要望、手段）は分けて考える、というように、体系化されたアプローチを使うと、本当に求められていることを拾い出しやすくなる。受講者の実体験（業務の成功例と失敗例）を、講師がマーケティングの手法で読んで解説する例示では、問題が明確化され、対応への道筋までが公式を当てはめるように解きほぐされた。普段行っているサービスが、なんとなくの行動だったことを痛感しつつ、これから業務で課題に向き合う際の幾ばくかのヒントを得られたように思う。もっと時間が欲しいと思った講義であった。

学術情報流通等各論

学術情報界隈のトレンドであるオープンデータ、オープンサイエンスの動向や、アクティブラーニングに代表される学習支援、図書館とビジネスのコラボレーションなど、将来の展望に関する話題のほか、著作権、古典籍、芸術まで、図書館職員として知っておくべき知識として、広範囲におよぶ講義が行われた。

・「図書館でのクラウドファンディング成功事例(民間企業の取り組み)」では、マネジメントを手掛ける企業による、大学図書館での実例を交えた紹介であった。プロジェクトを成功させるためには、支援者に非日常のサービスや体験を届けるだけではなく、密度の濃いコミュニケーションを保ち、継続した情報発信を行うことが必須、とのことであった。今回、実際にクラウドファンディング事業に関わった受講者がおり、『楽しかったけど大変でした』というコメントからも、人的リソースに相応の注力が必要であると感じた。

演習・班別討議

5～6人の班に分かれ、何度かメンバー替えをしながら、グループワークが行われた。

・1週目の後半2.5日間は、「新たな取り組みの創出・実践ワークショップ」として、まず前半に、現状分析からのアイデア出しとブラッシュアップの手法、およびプレゼンテーションへの心構えなどを演習形式で学んだ(強味・弱味の分析、SWOT分析、ユニット化、マップ化など)。後半は、メンバー替えの後、新しい図書館サービスの企画・発表を行った。正統派の提案だけでなく、奇想天外な案がいくつか提示され、プレゼンテーションの途中で爆笑が起こることもしばしばであった。自由な発言と意見交換を促すため、講師が雰囲気づくりを特に心掛けていたようで、非常にリラックスした空気の中で取り組むことが出来た。

・2週目には、「班別討議」として、国立大学図書館協会ビジョン2020の基本理念に基づいた新たな取り組みの企画書作りと発表が課せられた。2日分の午後、つまり正味1日ほどで作成しなければならず、ほとんどが研修会場に居残り、前の週とは打って変わって真剣に企画作りに取り組んだ。なかには筑波大学のPC室が閉まった後もファミレスで夜半まで作業を行った班もあった。3日目午後の発表では、最後に講評として、現場の管理職や教員から、企画の実現にあたっての具体的な指摘やアドバイスを受けた。一朝一夕で立てた企画は、厳しい突っ込みも少なくなかったが、失敗を恐れず、失敗から学び、ダメ出しを受けても諦めないこと、というコメントは、今後も心に刻んでおきたい教訓である。

その他

・研修終了後は、職場において新しい取り組みを考案し、同僚もしくは上司に提案した結果を提出する、という課題が出され、学んできた手法を早速試すこととなった(昨年度よりレポートから変更されたとのこと)。実践とはいえ、企画立案・発表と反応をまとめれば完了であり、実施までは求められないので、気負う必要はなかったのだが、結果、提出までにはかなり時間が掛かってしまった。レポートより手間が掛かる半面、研修の成果を職場へ披露するという意味合いと

しては、面白い課題だと思った。

・先達の感想として、長期研修は本当に良い、と見聞きしていたが、実際参加してみて、なるほどそのとおりであった。研修そのもので学んだことはもとより、全国に一気に仲間が出来るということは本当に大きな収穫である。まだ参加していない、これから参加したいという方は、本会報の過去の研修報告および長期研修ホームページ「受講者の声」の二種類に目を通すことをおすすめする。研修の熱気を追体験できるだけでなく、学びのヒントを沢山得られること間違いなしである。

・平成30年度は50回の節目となる開催だった。全体に通底するテーマとして、図書館の枠にとらわれず、新しいなにかへ積極的に取り組まなければならない、という危機感を含んだ展望が示されるとともに、従来からの役割である資料の収集・保存についても疎かにしないことが求められていると感じた。私個人がすぐに成果を上げるということはできそうにないが、今回大量に浴びた情報と“長研同期”という財産を手がかりに、この先、何がしかの還元ができるよう努めるつもりである。

最後に、推薦により参加の機会を与えてくださった公立大学協会図書館協議会に深謝するとともに、半月にわたる不在のサポートをいとわず、快く送り出してくれた職場の上司・同僚に、あらためて感謝の意を記したい。